

2022年7月10日(日)／説教者：神谷武宏

説教：「恵みと慈しみ」—2022年度 召天者記念礼拝—

招詞：ペトロの手紙—1:23～25

聖書：ヨブ記1:21、詩編23:1～6

「わたしは裸で母の胎を出た。裸でそこに帰ろう。主は与え、主は奪う。主の御名はほめたたえられよ。」(ヨブ記 1:21) この言葉が伝えていることは、人の「命」は、決して人が作り出しているものではないということです。

この御言葉の背景には、一人の人物が登場します。ヨブという人ですが、彼は非常にまじめで正しい人で、神を畏れ敬う信仰心の厚い人でした。しかし、そういうヨブに災難が次々と襲い、一瞬にして財産、愛する子どもたちをも亡くしてしまったのです。そのような状況の中で、彼は上着を裂き、髪をそり落とし、地にひれ伏し、そして語った言葉でした。

ヨブは、「命」というものは、神から与えられたものであるから、たとえ取り上げられても、それは神にお返しすることであり、当然のことであると神を褒め称えるのです。非常に力強い信仰ですが、中々、真似できる信仰ではないかもしれません。時に私たちは、納得のできない現状を目の前にして「どうしてですか、神様」と疑問と怒りをぶつけてしまうものだったりします。しかし、人の「命」というものは、決して人が作り出しているものではなく、また、人が粗末に扱うものでもないということ。ゆえに戦争で殺し合うことはもっての外であり、あってはならないこと、罪深いことです。《主は与え、主は奪う》ものであることを、人間は謙虚にそのことを覚えないといけません。

イエス・キリストが、十字架にかけられた時、その十字架上でこう祈りました。天の神に向かって「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます」と。この言葉は、詩編 31 篇 6 節の言葉とされています。そこには「まことの神、主よ、御手にわたしの霊をゆだねます」とあり、この言葉は、遠い昔からユダヤ人の母親が、子どもを寝かせる時にお祈りする言葉として用いられているようです。子どもをあやしながら、「まことの神、主よ、御手に・・・おゆだねします」と母親が祈る・・・それは、「神様おやすみなさい」という言葉として用いたという事です。そういう習慣のあったユダヤ社会の中で、イエスが十字架上の最後の言葉として、「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます」とおっしゃったのは、「お父さん、おやすみなさい」と言ったことになる。子どもが、母親に抱かれて、身をゆだねて「おやすみなさい」ということ、まさにそのようにして、イエスは神の御前に沈黙し、ゆだねて十字架上での最後を迎えた。

しかしイエスは、その十字架上で、ゆだねる祈りの前には、こうも言っています。「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」と、激しく神に訴える言葉も残っています。この2つの言葉は矛盾しているものですが、それは、この世で生きる事の難しさを、主イエスご自身が表してくださっているとも言えるでしょう。

「どうしてですか？」「何故ですか？」ということの多いこの世において、なお神に向かってゆだねて行く・・・それはまさに、《主は与え、主は奪う》という言葉に集約されているよ

うに思います。

もう一つ、この詩編 23 編は、前半は神が羊飼いで、人は羊であると譬えて、羊が羊飼いにゆだねて生きているように、人が神にゆだねて生きることのすばらしさを歌っているわけです。

鞭と杖は、狼がくれば、その鞭で追い払い、危険な所へはまり込めば、その杖で助けてくれるということ。羊飼いが羊をそのようにして守られるように、神にゆだねていく人生もまた、そのようにすばらしいものであると歌っているのです。

そして後半は、神がお客をもてなす主人に譬えられています。たとえ苦しい状況に置かれていても、私の心配をよそに、神の恵み、祝福は注がれているということ。

それは、「命のある限り／恵みと慈しみはいつもわたしを追う。」…神の恵み、神の祝福はこちら側が、追い求めて、掴み取るものと思いがちですが、聖書では、そうではなく、神にゆだねていく人生と言うのは、神の側が私を追い、神の側が私を包み込む、ということであるというのです。

この詩編 23 編を歌ったダビデは、非常に波乱万丈に満ちた人生を歩んでいます。神に喜ばれる歩みをしたかと思えば、人の奥さんを奪い、その夫を戦場に送り込み、殺してしまうという罪を犯します。また、敵に追われ命が脅かされ、さらに息子を亡くすという悲劇を経験しました。人生の敗北を経験し、孤独と罪深さのゆえに、消えてしまいたいと思うほどに苦しむのですが、しかし、そのような状況の中で、神の迫り、神の愛を感じ、「恵みと慈しみはいつもわたしを追う」という表現で、神の恵み、神の愛を言い表しています。

最後に「主の家にわたしは帰り／生涯、そこにとどまるであろう。」私たちは、帰る場所が在るということは、どんなに安心感を与えるものでしょうか。帰る場所が在るから、今を頑張って、精一杯、働くことが出来たりします。逆に帰る場所がないということは、どんなに不安で、寂しいことでしょうか。

それは私たちの生涯において、行き着く先はどこであるかということになります。私たちの行き着く先は“死の暗闇”“墓の暗闇”にあるのでしょうか？ 私たちの人生と言うのは、「死」に向かって歩んでいるのでしょうか？ 聖書はそのことに触れています。それは、イエス・キリストが、十字架にかけられ死んだあと墓に葬られ、そして三日目に復活したと聖書は記しています。不思議な出来事ではありますが、その「復活」とは何を意味しているのかと申しますと…。

人の歩みは決して「死」に向かって歩んでいるのではなく、「復活」という、「希望」に向かって歩んでいるということ。人の死は決して終わりではないということを聖書は語っているのです。ダビデは「主の家にわたしは帰る」という表現を持って希望を表しています。私たちもまた、そのような希望を持って、今を精一杯、生きて行きましょう。

先に召された敬愛する方々との再会を楽しみにし、一緒に、今を歩んでまいりましょう。聖書の言葉は、私たちがどのような状況にあろうとも、豊かに生きることを示しています。